

10年間勉強しても英語が上達しない
日本人のための新英語学習法

ロジャー・パルバース・著

小川綾・訳

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

はじめに

「言葉」とは、意味と秩序を伴った「音(響き)」である	8
英語習得の第一歩は、英語特有の「音」を理解すること	10
英語は、外国人が習得するには最も難しい言語の一つである	12
英語の「ペラペラ山」に登るために必要な三つの条件	13



日本人が知らない、 英語がたどった複雑な歴史を知る

18

英語習得に必要な大前提は、まず「英語の歴史」を知ること	20
第一の「渡来」——ヨーロッパ大陸からのローマ軍の侵攻と統治	21
英語の最も基本的な特徴は、その語源の多様さにある	22
第二の「渡来」——ヨーロッパからのアングロ-サクソン人の大移動	23
第三の「渡来」——バイキングの最初の襲来	24
第四の「渡来」——バイキングの度重なる襲来と侵略	25
第五の「渡来」——ノルマン-フランス人の襲来	26
異民族の「渡来」により、イギリスにまったく新しい言語が生まれた	27
イギリス古来の「ケルト語」は、「ラテン語」に駆逐された	29
語源の半分はラテン語だが、 それはローマ人の征服が原因ではない	30
現代英語の基礎は、アングロ-サクソン人によって作られた	31
英語はアングロ-サクソン語が基礎で、ラテン語に彩られている	32
ノルマン人の侵略で、イギリスの公用語はノルマン-フランス語に	33
「ノルマン-フランス語」と「古英語」は、 便利だが複雑な「中英語」を生み出した	34
古英語は具体的、ノルマン-フランス語は抽象的な意味を表す	35
語彙の半分はラテン語だが、使われるのはアングロ-サクソン語	37
アングロ-サクソン語が語源の語はシンプルだが 日本人には難しい	38
ラテン語が語源の単語は長くて複雑だが日本人にはわかりやすい	39
英語を料理にたとえると「ラザニア」のようなもの	40



英語は「文字」ではなく、 「音」と「イメージ」から学ぶ..... 42

- 言葉の「意味」と「発音」は、常に時代とともに変化していく..... 44
- 日本人にとって英語が難しいのは、日本語にはない「母音」が多いため..... 49
- 接しあう単語の発音同士がくっつく、英語の「接続」という作用..... 50
- 「接続」は、重要な「英語のマインドセット」の一つである..... 51
- 「オワ・タナ・サイアム」の本当の意味は?..... 54
- 英語が厄介なのは単語がつづりどおりに
発音されないことが多いから..... 57
- 英単語のスペルの暗記はあと。まずは「音」を聞いて意味を覚える! 59
- 英語は、「音」と「イメージ」をリンクさせて覚えれば忘れない..... 60
- 英語の「擬音語」のニュアンスを理解して
「英語のマインドセット」を身につける..... 65
- 英語の「擬態語」のニュアンスから
「英語のマインドセット」を身につける..... 70
- 英語は、共通する「音」を持つ単語同士に、
共通する「イメージ」「意味」がある..... 73
- 「gl-」の「音」で始まる単語には、「光る」イメージとニュアンスがある..... 75
- 「cr-」の音で始まる単語に共通する意味とニュアンスとは..... 76



語彙を飛躍的に増やす、 日本人のための「1-3-5メソッド」..... 82

- 大英帝国の発展とともに英語の語彙は激増し、
ついに「近代英語」が確立された..... 84
- 微妙なニュアンスを表現するときの、
日本語と英語の決定的な違いとは..... 85
- 10,000語の単語を覚えても、10歳の子供の英語しか話せない..... 86
- 英語がうまくならないのは「日本人」だからではなく、
学習法が間違っているから..... 88

16世紀「イギリス・ルネサンス期」に爆発的に増えた語彙	89
便利な接頭辞や接尾辞などが新しく生まれ、 語彙はさらに増加した	91
19世紀、アメリカに移住した人々が膨大な新英語を作り出した	94
英語のほとんどの単語には、別の「同義語」がある	95
語彙を飛躍的に増やす、⑧式「1-3-5 メソッド」	97
「1-3-5 メソッド」①—相手が言おうとしていることを理解する	98
「1-3-5 メソッド」②—ラテン語語源の単語はコツ次第で増える！	101
「1-3-5 メソッド」③—plat の「語根」の音には、「平ら」のニュアンスがある	102
「1-3-5 メソッド」④—接頭辞 re-の音には、「再び」の意味が加わる	105
「1-3-5 メソッド」⑤—接頭辞 anti-、pro-の音は、「反」「賛成」の 意味を加える	107
「1-3-5 メソッド」⑥—接頭辞 inter-の音は、「～の間」の意味を加える	109
「1-3-5 メソッド」⑦—接頭辞 over-の音は、「たくさんの」という 意味を加える	113
ネイティブスピーカーも、自分で意味を推測して単語を覚えている！	115
「1-3-5 メソッド」⑧—接頭辞 out-の音は、「～を上回る」という意味を加える	117
「1-3-5 メソッド」⑨—接頭辞 mis-の音は、「間違っ～」という意味を加える	118
「1-3-5 メソッド」⑩—接頭辞 in-の音は、「否定」の意味を加える	121
「1-3-5 メソッド」⑪—品詞を「～でいっぱい」の 意味の形容詞に変える接尾辞 -ous	124
「1-3-5 メソッド」⑫—形容詞を副詞に変える接尾辞 -ly	126
「1-3-5 メソッド」⑬—形容詞を強調する接尾辞 -ful	127
「1-3-5 メソッド」⑭—-ful と正反対の意味の接尾辞 -less	129
「1-3-5 メソッド」⑮—形容詞を名詞に変える接尾辞 -ness	131
「1-3-5 メソッド」⑯—名詞、形容詞を動詞に変える接尾辞 -ize	132
「1-3-5 メソッド」⑰—語根の script、scribe から語彙を増やす	137
「1-3-5 メソッド」を使えば、15,000 語の習得もこわくない	140
「1-3-5 メソッド」⑱—語根の tract は「引っ張る」という意味を含む	142
「1-3-5 メソッド」⑲—アングロ-サクソン語語源の 単語から語彙を増やす	145

無意識に使っている膨大な外来英語を調べ直し、語彙に取り込む	146
こんなにもある、日本人が日常で使っている外来英語	147
根本的に意味が間違っていたり、 限定的に使われている外来英語を見直す	148
日本人がよくやる、間違った意味の外来英語を使った失敗例	149
日本人がよくやる、和製英語を使った失敗例	151
発音など気にしない！とにかく和製英語でもどんどん使ってみる	153

英語の難所を 乗り越える 156

英語の難所①——「語順」が絶対であること	158
英語の難所②——「句動詞」の代表例 その1 put up with	158
英語の難所②——「句動詞」の代表例 その2 to be out of	161
英語の難所②——「句動詞」の代表例 その3 get over	163
英語の難所②——「句動詞」の代表例 その4 hold+前置詞	164
英語の難所③——アクセントやイントネーションで文意が変わる	167
英語の難所④——「 ^{イディオム} 慣用句」の代表例 その1 put down	172
言語は「生きた会話」の実践から切り離しては絶対に覚えられない	174
英語の難所④——「 ^{イディオム} 慣用句」の代表例 その2 put down	176
わからない単語を耳にしたときは、会話を中断させないで聞き返す	178
英語の難所④——「 ^{イディオム} 慣用句」の代表例 その3 put down	180
「聞く、考える、分析する」を常に心がける	181

日本人のための、 ⑧式・実践的英語上達法 184

本当に英語がうまくなるための大前提①——リラックス！	186
本当に英語がうまくなるための大前提②——「自分」に自信を持つ！	188

本当に英語がうまくなるための大前提③——「日本文化」に自信を持つ！……	190
本当に英語がうまくなるための大前提④——常に英語を話さなくてはならない 状況に自分を置く……	194
本当に英語がうまくなるための大前提⑤——自然に口をついて出てくる 「表現語彙」を増やす……	196
英語には、重要な独自の非言語的表現、 ^{ボディー・ランゲージ} 「身振り言語」がある……	197
英語では、 ^{ボディー・ランゲージ} 「身振り言語」は「言葉」と同じくらい重要である……	200
英語の派手な ^{ボディー・ランゲージ} 「身振り言語」は、 教会での牧師の説教から始まった……	202
日本流の「エイカイワ」を勉強しても、英語は絶対にしゃべれない	204
⑧式・実践的英語上達法①——相手とは必ず「視線を合わせる」……	205
⑧式・実践的英語上達法②——身振り言語から 「言葉以外のもの」を読み取る……	206
⑧式・実践的英語上達法③——自分が話しているときも、 必ず「相手の目を見る」……	208
英語の映画を観るときは、登場人物の ジェスチャーをよく観察する……	209
文法や発音が正しいかは、 英語を話せるようになるのとは関係ない……	210
⑧式・実践的英語上達法④——相手を「 ^{Fake it} ごまかす！」……	212
⑧式・実践的英語上達法⑤——相手を「 ^{Fake it} ごまかす！」の例……	214
相手の背景にある、文化や習慣の「マインドセット」を身につける	217
⑧式・実践的英語上達法⑥——英語で「自分のストーリー」を 話せるようにしておく……	219
⑧式・実践的英語上達法⑦——興味のあることに関する 語彙を増やしておく……	223
⑧式・実践的英語上達法⑧——相手の質問をわざと繰り返す……	224
⑧式・実践的英語上達法⑨——ある単語が相手に通じなかったら 別の同義語を使う……	227
⑧式・実践的英語上達法⑩——ネイティブが使うジェスチャーや 身体言語を真似する……	230

はじめに

「言葉」とは、意味と 秩序を伴った「音(響き)」である

芸術とは私たち人類の前に置かれた小さな鏡のようなものだといえます。私たち人間はこの鏡をのぞいてみるのも見て見ぬふりをするのも自由です。

しかし、この鏡をじつとのぞいてみると、人生の本当の姿が見えてくるかもしれません。それは美しい輝きのなかにあるかもしれませんし、みすぼらしい暗闇のなかにあるかもしれません。あるいは実際には、その両極端の中間に広がる灰色の光のなかにあるかもしれません。

しかし、この「芸術の鏡」の他にもう一つ、見て見ぬふりをすることができない鏡があります。私はこの鏡を「長い鏡(the long mirror)」と呼んでいます。この鏡は、人類の始まり——つまり遺伝学的にはちょっと毛深い「いところ」といえる類人猿からの進化を始めた時点——にまでさかのぼる長い鏡です。

この鏡は私やあなたの一生をはるかに超えて、この先、数えきれないほどの世代を重ねる人類の営みをも超えて延び続けていくのです。

この長い鏡は、「言語の鏡」です。

そもそも「言語」とは何でしょうか？

言語とは、ときにジェスチャーを伴って発せられた秩序のある「音」(響き)だということができるでしょう。ここでいうジェスチャーとは、顔や手やその他の身体からだの部分を使って表されるしぐさです。

聴覚に障害を持つ人のなかには「手話」というジェスチャー

による音を伴わない言語を使うかたもありますが、この本では、秩序化された音、意味を成す音、または少なくとも意味を成そうとして発せられる音、そして非言語コミュニケーションの表現の約束事に焦点を当てたいと思います。

ヒト以外の動物の多くが、捉えようによってはヒトが発する音よりもさらに複雑な音を作り出して使っています。それらの動物が発する音と私たちヒトが発する音の目的は同じです。仲間にシグナルを送る、すなわちコミュニケーションを図るための音です。

しかし、ヒトが発する音だけが「ロジック」を持っているようなのです。ここでいう「ロジック」とは私たちが過去に起こったこと、今起こっていること、そしてこれから起こるであろうことを考えたり説明したりするときに必要な「論理」のことです。

現在、世界では約6,500の言語が実際に使われています。

その一つ一つが多様な音(響き)でできています。

これらの言語のなかには、一つ一つの音や、音の組み合わせが似ている「同系言語(related languages)」と、共通する部分がきわめて少ない「異系言語(unrelated languages)」があります。

この「同系」と「異系」という言葉は、人間でいえば「親戚関係」にあたる言語と「赤の他人」にあたる言語を区別して考えるのに似ています。

たとえば、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語などは、古代ローマで使われていた共通言語であるラテン語に起源を持つ言語で、「ロマンス諸語」と呼ばれる系統の「同系言語」です。先ほどの人間社会にたとえば、これらの言語はすべて「親戚関係」にあるということができます。

英語、オランダ語、スウェーデン語、デンマーク語は、後に

現代ドイツ語に発展した言語を共通の「親(祖語)」とする「ゲルマン語派」に属する「同系言語」です。

同様に、ロシア語、ポーランド語、チェコ語、ブルガリア語は「スラヴ語派」に属する「同系言語」で、アゼルバイジャン語、ウズベキスタン語、カザフ語、トルコ語は35近くある「テュルク諸語」という「同系言語」の一部です。

しかし人間の家族や親戚のなかにいろいろな人がいるように、同じ語族や語派に属する言語のなかにも、主に音の種類が大きく異なる言語があります。他の言語には存在しない音を使う言語もありますし、アルファベットの「o」という文字で表される一般的な音も、ポーランド語とロシア語では微妙に違いますし、英語と日本語でもまた異なります。

たとえば、アメリカ人が日本語の「そう(そお)ですね」(So-desu-ne)と言うのをよく聞いてみると、アメリカ人の発音する「o」は日本人の「お」と比較して、より唇の丸みを伴った「う」の母音(円唇母音)に聞こえるのがわかるかもしれません。

英語習得の第一歩は、 英語特有の「音」を理解すること

まず第一に、この本では、いまだに英語の習得に苦しんでいる多くの日本のみなさんが、それを克服するために特に意識しなければならないこととして、英語という言語の「音」(響き)という部分に焦点を当て、それを深く掘り下げてみたいと思います。

なぜなら、

すべての言語は「音」で成りたっている

からです。

英語で使われる「音」の種類や組み合わせを理解することができれば、
一つ一つの単語の意味を覚えることに集中するよりも、
より速く、より完璧に英語を学ぶことができる

と断言できます。

日本における英語教育があまり効果的でないのは、
言葉の意味や定義にばかり力を入れているから

です。

日本人の多くが、外国人(英語とは類似性のない言語を話す国の人々を含む多くの外国人)よりも英語を話すのが苦手な主な原因の一つはまさにここにあるのです。

「言語は音である」ということを忘れないでください。

その言語の「音の特性」をマスターすることができれば、その言語をマスターすることはそう難しくありません。

ここで私は、ネイティブの英語スピーカーに理解してもらうためには、日本人を含め、あらゆる外国人が「完璧な英語の発音をしなくてはならない」と言っているのではありません。

ネイティブスピーカーが理解できるように発音できさえすれば、それでいいのです。

英語という言語について最も特徴的なことのひとつとしていえるのは、

英語は、ネイティブスピーカーの数よりも、
非ネイティブスピーカーの数のほうが多い言語である

ということです。

このような言語は他にはありません。

英語には日本語のような「標準語」というものは存在しない。
ネイティブスピーカーも含めて、
英語を話す人はみんながみんな、「訛^{なま}って」いる

のです。

英語は、外国人が習得するには
最も難しい言語の一つである

「これを言っては身もふたもない」ということを最初にあえて
言ってしまうですが、

英語は外国人が習得するには、ものすごく難しい言語で
ある

ということです。

私は、自分が英語のネイティブスピーカーとして生まれたため
ぐりあわせに感謝せずにはられません。

私は大人になってから、ロシア語とポーランド語と日本語を
学びました。

この三つの言語も世界の言語のなかで難しい言語だといわれ
ていますが、実は、英語はこの三つの言語のどれよりも学ぶの
が難しい言語です(英語、ロシア語、ポーランド語、日本語のうち、
「話す」ことを学ぶのが一番簡単なのは日本語です。なぜかを知り
たいかたは、私の書いた『驚くべき日本語』[集英社インターナショ
ナル刊]を読んでみてください)。

しかし、英語特有の「ロジック」を理解することができれば、
これまで英語習得に苦勞してきたみなさんでも、驚くべき速さ
で、しかも完璧に英語をマスターすることができます。

「英語特有のロジックを理解する」とは、言い換えると、「英
語の考え方 (mindset : マインドセット)」を身につけるとい

うことです。

キーワードは「考え方、マインドセット」です。

わかりやすくいうと、「マインドセット」とは、ある社会や集団のなかで確立している思考様式、態度、価値観などのことを意味します。

ここまで読んで、みなさんのなかには、
「そんなことはわかってるけど『言うは易し、行^{やす}うは難^{かた}し』だよ」

と思っているかたがいるかもしれません。

でも正しい方法でチャレンジすれば、「英語のマインドセット」を身につけることはそれほど難しいことはありません。

ピアノやチェロなど、さまざまな楽器で音楽を奏でるのは決して簡単ではありませんね。特に不安、恐れ、気おくれ、怒り、フラストレーションなどを感じながらだと、その楽器をどんなに練習しても本当の音楽を奏でることはできません。

新しいことを始める前にまず、不安、恐れ、気おくれ、フラストレーションという最初の敵に打ち勝つ必要があります。

「才能の有無」は二の次です。

まだ、ある外国語をうまく話すことができなくても、それを「友だち」や「親友」のようなものだと考えてみてください。ぎゅっと抱きしめてみてください。大好きになってください。

そうすれば、その言語は生涯ずっと献身的にみなさんの努力に報い、忠実な友であり続けてくれるでしょう。そうしているうちに、ひょっとしたらその言語が流暢^{りゅうちょう}に話せるようになるかもしれません。

英語の「ペラペラ山」に登るために 必要な三つの条件

では、生まれたときからみなさんの心と身体にすっかり刷^すり

込まれ、英語習得を根本で邪魔している「日本語のマインドセット」を、「英語のマインドセット」に換えるにはどうすればいいのか？

これができれば、目の前に高くそびえる、とても登れそうにない「山」に、以前よりはるかに楽に登れるようになることを、私が100%保証します。

私はこの山に「ペラペラ山」と名前をつけて呼んでいます。

いつの日かあなたもこの「山」の頂上に立ち、両手を空高く突き上げて「やったぞ！ ペラペラ山の頂上に立ったぞ！」と叫べるようになるでしょう。でも、この「ペラペラ山」の頂上に立ちたいと望むならば、次の三つが絶対に必要になります。

- ① 好奇心と熱意と情熱から成る「正しい姿勢」
- ② 「結局のところ英語とはどういう言語なのか？」についての「正しい知識」
- ③ この本で私がみなさんに提供する「正しい装備」

最初の「姿勢」については、私はほとんど何もすることができません。

これは完全にあなた次第です。

二つめの「知識」とは、英語という「山」についての知識です。

高さはどれくらいなのか？——かなり高いです。

山の斜面の角度はどれくらいなのか？——残念ながらほとんどの道のりが急斜面です。

頂上にたどり着くまでにどれほどの岩場や落とし穴や回り道を越えて行かなくてはならないのか？——ほとんど数えきれないほどの数です。

おそらくみなさんにはショックなことでしょうが、これが現実です。

だからこそ、まずは、

^{ちまた}巷にあふれかえっている、英語を習得するのなんて「へのかっぱ！」などと楽しそうな売り文句のタイトルの本には、絶対に手を出さない

てください。

英語の習得は「へのかっぱ」なんかではありません。

ほんとうにとんでもなく難しいことなのです。

でも、もう一度繰り返しますが、この本で私がみなさんにお教えしようとしている「英語のマインドセット」を習得し、英語の「音」と「ロジック」を理解すれば、この「ペラペラ山」の頂上を目指す山登りはずっとずっと楽なものになります。

次に三つめの「正しい装備」についてお話しします。

普通、山登りをする場合、登山靴、上着、保温性の高い肌着、丈夫なロープ、先にフックのついたクライミング用のロープ、頑丈なテント、高性能なラジオなどの装備が必要です。

同じように「ペラペラ山」に登るのにも適切な装備が必要なのです。

私は、登山靴やロープや温かい肌着のように、外国語という山を登るために必要な独自の装備を考え出しました。そのおかげで、ポーランド語や日本語という一般には難しいとされている言語を、一年もしないうちにマスターすることができました。

私が最初に学んだ外国語はロシア語でしたが、ロシア語のときは、それを学びながら独自の方法を暗中模索しながら考えていったので、他の二つの言語よりは習得に時間がかかりました。

でも、私がその過程で身につけた手法を知れば、同じように、みなさんも英語をそれほど時間をかけずにマスターすることができるはずです。

学校で何年間も必修科目として英語を学んでいるにもかかわ

らず、日本人の多くが英語をうまく話せないのは、

英語を学ぶツールとして、「単語の意味や文法や『書き言葉』にフォーカスを当てる」という間違ったアプローチをしている

からです(もちろん単語の意味や文法や「書き言葉」も大切です)。

でも、ネイティブスピーカーがこれらにフォーカスするのは、子供のときに「音」を習得したあとのことです。そして、

非ネイティブスピーカーも、ネイティブの子供と同じ順序とやり方で英語を学ぶ

べきなのです。

言語に関する間違った考え方は、間違った服装や装備のようなものです。

たとえば、水着を着て、ゴム製の水かきをつけて、シュノーケルを口にくわえて、高い山に登ろうとしているようなものです。

この本では、英語という高い山に登ろうとするみなさんに、その道中に点在している高原にたどり着くための経路を記したガイドブックと地図を示したいと思っています。

「英語のマインドセット」を習得するために大切な考え方は、この高原(P102参照)を目指して段階的に登って行くということです。

そのために、まず最初に、英語の歴史について簡単に説明し、英語固有の音と、英語という言語を織り成す「マインドセット」を作り出している一本一本の「織り糸」について詳しく理解してもらいたいと思います。

そして次に、私が編み出した、

「㊦(パルバース)方式」という、外国語習得方法の秘訣と コツ

をお教えします。

私はこの方法を、英語を話すことを目指す日本人のための英語学習に取り入れてきました。私もそれなりに日本語をよく知っているつもりですので、英語学習における日本人ならではのハードルの高さをよく理解していると思っています。それは、私自身も日本語を学ぶにあたり同じような困難を経験したからです。

この本で、私はみなさんのシェルパ(登山ガイド)として、最後まで責任を持って「ペラペラ山」の頂上までたどり着くためのコツと方法を提供します。

さあ、みなさんの持っている好奇心を刺激し、熱意をかきたて、情熱を燃やしてこの本のページをめくってください。

そして、私と一緒に「ペラペラ山」登山の第一歩を踏み出しましょう！

ロジャー・パルバース

2015年1月

オーストラリア、シドニーにて



STEP

日本人が知らない、
英語がたどった複雑な歴史を知る

「英語とは…『音』のたぐいまれな、
想像力に富んだ、音楽的なミックスである。」

—————ジョージ・バーナード・ショー、戯曲「ピグマリオン」より

英語習得に必要な大前提は、 まず「英語の歴史」を知ること

私は東京工業大学で英語を教えていた何年ものあいだ、学期が変わって新しいクラスが始まるたびに、

「英語がどれくらい古い言語なのか知っていますか？」

と学生たちに聞いていました。でも、正しい答えを知っていた学生はほとんどいませんでした。

「現在使われている英語の始まりは、約1000年前」というのが正しい答えです。

もちろん現在の英語のネイティブスピーカーが1000年前に使われていた英語をそのまま理解できるわけではありません。専門的な勉強をした人でなければ、21世紀を生きる私たちには当時の英語はほとんど理解できません。

まず、みなさんに最初にしっかりと理解し、心構えの準備をしておいていただきたいこと。それは、「はじめに」でも書きましたが、

英語はとんでもなく難しく、複雑で、変則的な言語である

ということです。

しかしこの言語がどのように生まれ、どのように発展してきたのかを理解すれば、これまでよりずっと速く、英語をマスターすることができます。つまり、現代の英語の独特の構造やくせ、複雑さを理解するためには、まず、その歴史を知る必要があります。

そこで今から、英語の歴史を、5つの異民族と異言語の突然の「渡来(arrival：㊦アライヴァル)」という観点から紹介してみようと思います。

まずは、いつ、どこで、この5つの異民族と異言語の「渡来」が起こったのかに注目してみましょう。

第一の「渡来」

——ヨーロッパ大陸からのローマ軍の侵攻と統治

1997年、私と妻のスーザンは、当時8歳～14歳だった4人の子供を連れて、1カ月かけてイギリスを旅行しました。12人乗りのバンを借りて3,500kmもの道のりを走ったのです。

大きなバンを借りたのは大正解でした。この大きな車のおかげで、子供たちはおたがいから離れて座ることができたからです。一人の子供が一行全部を使うことができたのです。

私は子供たちに「Own row means no rows！（自分の列があれば、けんかはなし！）」と言ったのを覚えています。

なぜここでこの話をしたかというと、このエピソードは167ページ～で紹介する英語の特徴をよく表しているからです。

英語には、スペルが同じでも、発音と意味が違う単語がたくさんあります。

この文章に出てくる最初の「row」は「ロー」と発音し、「列」という意味の単語です。この言葉は、ドイツ語の似た言葉から英語に取り入れられました。

二つめの「row」は「ラウ」と発音する「騒々しいけんか」という意味の単語です。残念ながらよく使われるこの言葉は、ラテン語から英語に入ってきました。

また、同じラテン語の単語から派生して「rowdy(ラウディ：①乱暴者／②乱暴な、騒ぎ立てる)」や「raucous(ローカス：③騒々しい、乱暴な)」という複数の単語が英語に加わりました。

英語にはさらにもう一つ、三つめの「row」という単語があります。

発音は一つめと同じ「ロー」で、「ボートをこぐ」という意味の動詞です(※この単語はもともとサンスクリット語の「oar(オール)」という意味の語が、古代ギリシャ語、ラテン語、古ノルド語を経て英語に

入ってきたものです)。

英語の最も基本的な特徴は、 その語源の多様さにある

ちょっと話が脇道にそれましたが、これは英語の基本的な特徴(最も基本的な特徴といえるかもしれません)をよく表しています。

それは、

英語の最も基本的な特徴は、その語源の多様さ

にあるということです。

PHOTO

さて、私たち家族が12人乗りのバンでイギリスの田舎を旅したときの話に戻りましょう。

イングランド最大の城であるドーバー城に立ち寄った時のことです。私はそこで見たものに圧倒されました。ドーバー城はイギリス南東部のケント州の海岸にあり、イギリスとヨーロッパ大陸を隔てるドーバー海峡を見下ろす絶好の場所に建っています。私は子供たちを連れて、切り立った崖のてっぺんにある灯台を見に行きました。

現在は一つしか残っていませんが、この場所にはもともと二つの灯台がありました。その灯台は今の時代によくある形ではなく、古代ギリシャ建築の模型に出てくる塔のような形をしていて、チェスゲームの駒の一つで塔のような形をした「ルーク」に似ています。

この灯台は西暦43年にローマ軍によって建てられました。この西暦43年というのは、ローマ軍がイギリスに「渡来」(正確には「侵略」です)してから1世紀ほど後のことです。ローマ軍が本格的にイギリスを統治し始めたのが、この西暦43年なのです。

つまりこの灯台は、イギリスにとって歴史的な分岐点となった年に建てられたものです。

イギリスとヨーロッパ大陸を隔てる海峡を行き来する船が一望できる場所にあるこの灯台が、ローマ帝国がイギリスを完全に制圧するための戦略の一環として建てられたことは間違いありません。

私はこの灯台のすぐそばに立って、その白いすべすべの壁にほおを当ててみました。石造りの壁は夏の太陽に温められてほんのり暖かく、私は目を閉じて、約2000年前にまさにこの場所に立っていたであろうローマ軍兵士の姿を想像しました。

私は子供たちに「この建物はイギリスの歴史、そして私たちが今使っている言語の歴史にとってすごく大切なできごとを象徴しているんだ」と言い、みんなでその歴史の始まりに思いを馳せました。

第二の「渡来」

——ヨーロッパからのアングロ-サクソン人の大移動

さて、第二の「渡来」は、数世紀にわたって続いた大規模なものです。

海を隔てたいくつかのヨーロッパの地方から、約25万の人々がイングランドに渡ってきたのです。この渡来は、他の4つの渡来ほど残酷な結果をもたらすものではありませんでした。イギリスにはこの地を征服しようとやって来た人々も大勢いましたが、ここを安

住の地としようとしてやって来た人々も大勢いたのです。そのなかには今で言う「ボートピープル」、すなわち自国を追われた難民もいたにちがいありません。

この時期にイギリスに渡って来たのは、ほとんどがユトランド半島(現在のデンマーク)、アンゲルン半島(ユトランド半島の付け根で、アングル人が住んでいた地域)、ザクセン地方沿岸、フリースラント地方(現在のオランダとドイツの一部)という4つの地域からの人々でした(ここでいうザクセン地方は、ドイツ北部に当時あった地域で、チェコとポーランドに隣接する現在のドイツ西部のザクセン州のことではありません)。

現在、これらの地域から来た人々は、ひとくくりに「アングロ-サクソン人」と呼ばれています。

PHOTO

第三の「渡来」 ——バイキングの最初の襲来

イギリスの北東部にリンディスファーン島という小さな島があります。この島は「ホーリー島(聖なる島)」とも呼ばれていますが、頭のような形をした部分から岬が長い鼻のように突きだしていて、

まるで日本の「てんぐ」のような形をしています。引き潮の時間帯には、イギリス本島から干潟を歩いてこの島まで行くことができます。

7世紀初めにはこの島に男子修道院が建てられ、そこを拠点にイギリス北部全体へとキリスト教が広められました。しかし西暦793年のある日、キリスト教とは関係のないバイキングがこの島に「到着」し、修道士を皆殺しにして、修道院を破壊しました。

現代のある学者は、この惨事を次のように記しています。

「こんな恐ろしいできごとは、イギリスの歴史が始まって以来初めてのことだった。異教徒たちは、祭壇のあたり一面に聖人たちの血をぶちまけて、遺体を道に落ちている汚物のように踏みつけた」

これは、どう見ても歓迎される「渡来」ではなかったのです。

PHOTO

第四の「渡来」

——バイキングの度重なる襲来と侵略

イギリスのケント州北岸にシェピー島という小さな島があります。ロンドンから約75km離れたところです。この総面積93平方キロメートルの小さな島の「シェピー」という名前は、「sheep(シープ：

⑧羊)」という語が由来です。つまり「羊の島」ということです。

この島にも次々にバイキングの集団が「到着」し、島の人々を殺し、島全体を破壊しました。

バイキングたちは、西暦832年、851年、854年、そしてその後も、まるで繰り返す津波のように押し寄せてきたのです。

第五の「渡来」 ——ノルマン-フランス人の襲来

ロンドンから南南東に約80kmのところに、人口約6,000人のバトルという小さな町があります。

この「戦い」を意味する「バトル」という名前は、イギリス史上最も決定的かつ重要な「ヘースティングズの戦い」の主戦場になった町にふさわしいものだと言えるでしょう。

ヘースティングズはバトルのすぐ近くにある町です。つまり、イギリス史上最も有名なこの戦いは、本当は、「ヘースティングズの戦い」ではなくて「バトルのバトル(バトルの戦い)」と呼ばれるべきなのです。

西暦1066年の10月、フランス北西部、コタンタン半島あたりに住んでいた民族ノルマン-フランス人が「到着」し、この地域をすでに支配していたアングロ-サクソン人たちに戦いを挑み、勝利しました。

PHOTO

5つの「渡来」

ヨーロッパ

イギリス

侵略

③ 7世紀

バイキング
(古ノルド語)

侵略

④ 9世紀

バイキング
(古ノルド語)

侵略・統治

① B.C.1~1世紀

ローマ帝国 (ローマ人)
(ラテン語)

大移動・移住

② 5世紀

アングロサクソン人
(アングル人+サクソン人)
(アングロ-サクソン語)

侵略

⑤ 11世紀

ノルマン-フランス人
(ノルマン-フランス語)

(※矢印は、特定の地域を示すものではありません)

異民族の「渡来」により、 イギリスにまったく新しい言語が生まれた

これが、異民族によるイギリスへの「5つの渡来」の概要です。

この5つの突然の「渡来」は、イギリスの歴史を変えたのはもちろん、後に「英語」と呼ばれることになる言語の起源と発展に大きな影響を与えました。

この5つの渡来の後も、何世紀にもわたって、島国イギリスの長くて侵入しやすい海岸には、近隣地域から数えきれないほどの招かれざる客が移住、侵略、襲来をしました。

日本もイギリスと同じ島国ですが、日本の海岸線とアジア大陸の

距離が、イギリスとヨーロッパ大陸の距離よりはるかに遠いのは幸いなことでした。また、イギリスとヨーロッパ大陸の間の海峡は日本を取り囲む海と比べてかなり穏やかであるということも影響しました。

もし日本が三つの異なる国(たとえば、モンゴルと中国と韓国)の人々に侵略・征服されていたとしたら、日本語の発展の過程はまったく違っていたはずです。しかし、不幸なことに、イギリスには人々を残酷な侵略者から守る「神風」は吹かなかったのです。

ではいったい、このような招かれざる客の渡来は、人々の話す言語にどのような影響を与えたのか？

端的に言うと、

イギリスの人々が使っていた元の言語は、
「まったく新しい言語」に変化を遂げた

のです。

これら異民族たちの渡来が起こらなければ、今ごろ、イギリスの人々は、ローマ人がイギリスにやって来る前に使っていた主な言語であった「ケルト語派」の言語を話していたに違いありません。そして、日本の学校や大学ではケルト語の授業が行われ、私は今ごろ「英語の本」ではなくて「ケルト語の本」を書いていたことでしょう。

「English」という語はもともと、現在のドイツ北部とデンマーク南部に暮らしていたアングル人が由来です。彼らが自分たちをアングル人と呼んだのは、彼らの暮らしていた土地が海岸から「angle(アングル：⑧曲がった所、角度、鉤)」のように突き出していたからです。つまりイングランドの「England」という国の名前と「English」という言語の名前は、両方ともアングル人から借りてきた(正確にいうと「押しつけられた」)もののなのです。

では次に、なぜ、どのようにして、英語は現在の形になったのか、

そして先にお話しした5つの渡来がどのように関係しているのかを見ていきたいと思います。

この「なぜ」と「どのように」が理解できれば、英語という複雑な言語の構造が把握できると思うので、英語の高い山をより簡単に登り切ることができるはずだからです。

イギリス古来の「ケルト語」は、 「ラテン語」に駆逐された

のちに英語となる言語に決定的な影響を与えたものが三つあります。

驚かれるかもしれませんが、ローマ人がイギリスに到着する前に使われていた「ケルト語」はその三つのうちの一つではありません。

現在の英語には、ケルト語を語源とする言葉はほとんどないので

す。おもしろいことに、ケルト語を語源としてその後の英語に根づいた言葉で、最も重宝されている単語をあえて二つ挙げるならば、「ass (アス：⑥ロバ)」と「whiskey (ウィスキー：⑥)」ということになるでしょう。

このウィスキーという言葉はもともと「命の水(water of life)」という意味です。

「ケルト語派」の言語を起源とする英単語が少ないという事実からわかるように、イギリスでもともと使われていた言語は、招かれざる侵略者の言語によって征服されてしまったのです。

前述したドーバーの崖の上にある灯台が、強大なローマ帝国の支配拡大の最前線、すなわちイギリス支配の象徴であったことについてまず考えてみましょう。

ローマ帝国は5世紀半ばまでの約400年間、イングランドのほぼ全土を支配していました。ローマ帝国はそこで道路を造り、下水道設備を整えました。のちに主要都市となる町の多くを造り、それぞ

れに名前をつけたのもローマ人でした。これらの町の名前は、多少形を変えながら現在も使われています。

英語の歴史に詳しくない人には想像もつかないでしょうが、たとえば、カンタベリー、リンカン、マンチェスター、ロンドンなどの町の名前はすべて、ローマ帝国の「リング・フランカ(共通語)」であった「ラテン語」が語源です。

具体的な理由は後述しますが、なんと実は、

現代英語のボキャブラリーの半数以上は、
「ラテン語」が語源なのです。

語源の半分はラテン語だが、
それはローマ人の征服が原因ではない

英語のボキャブラリーの半数以上がラテン語が語源だと聞くと、前述したように、ローマ帝国が西暦43年にイギリスを侵略し、その後の5世紀半ごろまでイギリスを支配していたことが原因だと考えるかもしれません。

でも、それは違います。

ローマ帝国がイギリスを統治していた時代のラテン語が語源で、現在も英語として使われている単語は、実はたった200語ほどしかないのです。

もちろん、ローマ帝国はイギリスに非常に多くのものを残しました。

現在もイギリス各地で考古学調査が行われ、当時のさまざまな遺物や遺跡が発掘されています。一例を挙げると、銀、金、ベルトの留め金、ローマ軍兵士の使った盾やガレアかぶと(兜)の一部、鋭くとがった鉛や鉄でできた投げ矢、大量のコイン、さまざまな陶器類、モザイクで飾られた床、豪華な浴場の遺跡などです。

土のなかからはこれだけの遺物が出てくるというのに、不思議な

ことに、言語に関していえば、ローマ帝国の遺産はほぼ「皆無^{かいむ}」なのです。

現代英語の基礎は、 アングロ-サクソン人によって作られた

これには二つの理由があります。

一つは、ローマ人は典型的な「占領者」であり、「定住」を目指した入植者ではなかったということです。ローマ人は権力を手にしたかっただけで、現地の暮らしに溶け込もうとはしませんでした。

そして、二つめの理由は、ローマ人のあとに、「定住」を目指してやって来て、先住者との永続的なつながりを築き上げた新しい占領者が、先にいたローマ人にとって代わったということです。

イギリスの言語における転換期は、ローマ人が去った何世紀もあとにやって来たのです。

ローマ人のあとにやって来た新しい占領者である「アングロ-サクソン人」は、当然ながら彼らの言語であるさまざまな形式の「ゲルマン語派」の言語とともにやって来ました。そして、この「アングロ-サクソン人」の言語が、現在の英語の基礎を作ったのです。アングロ-サクソン人と呼ばれるようになった民族は、アングル人やサクソン人にバイキングたちが加わってできた民族です。

実際に、アングロ-サクソン人の使っていた言語(以下、総称して「アングロ-サクソン語」)は、「古英語(Old English)」と呼ばれています。

現在の英語のネイティブスピーカーが「アングロ-サクソン語」を聞いても理解できませんが、現在のドイツ人ならばいくらか意味がわかるのではないかと思います。アングロ-サクソン語は、あらゆる面で、英語よりもドイツ語に似ているからです。

英語には、ゲルマン語よりもラテン語に由来する言葉のほうが多いにもかかわらず、ゲルマン語派に分類されているのは、アングロ-

サクソン人が英語の基礎を作ったという事実があるからです。

英語はアングロ-サクソン語が基礎で、 ラテン語で彩られている

ここで一度「英語」を「団地」のようなものだと考えてみてください。

- 団地の建物を支える基礎部分、柱、壁に当たるのが「アングロ-サクソン語」
- 外壁のペンキや、窓のガラスや、色とりどりのタイル張りの屋根に当たるのが「ラテン語」です。

その両方がないとこの団地は完成せず、なかに住むことはできません。

これが、英語が普通の言語の2倍も難しいといわれる理由です。この「英語団地」に住みつくためには、

このまったく異なる二つの言語から派生した単語を
両方マスターしなくてはならない

のです。先ほどお話しした5つの渡来のうち、第三と第四のバイキングの襲来と侵略はおそろしいほど過激なものでした。

しかし、アングロ-サクソン人の「言語学上のいところ(ゲルマン語派の民族)」にあたるバイキングが使っていた「古ノルド語」は「ゲルマン語派」の一つだったので、すでに同じ「ゲルマン語派」であるアングル人とサクソン人が使っていた言語も加わって、「アングロ-サクソン語」、すなわち「古英語」の建物を支える基礎、柱、壁を造りなおす必要はありませんでした。

それどころか、この「古ノルド語」はアングル人とサクソン人の言葉に何千もの単語を加え、そのボキャブラリーをより豊かなもの

にしたのです。

参考までに、「古ノルド語」から英語に取り入れられ、今も現代英語で使われている、基本的で便利な言葉をいくつか挙げてみましょう。

anger	(アンガー：④怒り)
awe	(オウ：④畏敬の念、元の意味は「恐怖」)
birth	(バース：④誕生)
egg	(エッグ：④卵)
hell	(ヘル：④地獄)
husband	(ハズバンド：④夫)
knife	(ナイフ：④ナイフ)
odd	(オッド：④奇妙な)
skin	(スキン：④肌)
steak	(ステーキ：④ステーキ)
ugly	(アグリー：④みにくい)

ノルマン人の侵略で、 イギリスの公用語はノルマン-フランス語に

さらに、好戦的なバイキングの侵略先はイギリスだけにとどまりませんでした。バイキングは現在のウクライナの一部やカナダなど、距離的にも故郷の北欧から遠く離れている多くの土地を侵略しました。「ノルマン」が「北方の人」を意味することからもわかるように、1066年にイギリスを征服したノルマン-フランス人もスカンジナビアから来たバイキングの子孫だったのです。

しかし、このバイキングによる襲来と征服は、古英語の基礎、柱、壁をより強固なものにしました。つまり、

現在のイングランドに住む人々は、11世紀初めに、
すでにケルト語やラテン語の影響をほとんど受けていない
ゲルマン語派の言語を話していた

のです。

ところが、その後、1066年のバトルでの戦い(P26参照)で、ノルマン-フランス人によってアングロ-サクソンの王が殺された結果、勝者の言語でラテン語系の「ロマンス語派」の一つである「ノルマン-フランス語」が公用語となったのです。

そのためにその後、この土地で成功、繁栄するためには、イギリス人はノルマン-フランス語を身につけなくてはならざるをえなくなりました。

この歴史を知ると、新しく公用語となったこのロマンス語派であるノルマン-フランス語が、もともと使われていた古英語を駆逐して、今ごろイギリスでは、当然フランス語が使われているはずだと不思議に思われるかもしれません。

実際、征服者の言語がその土地の公用語となるケースはよくあることです。征服された側は世代を重ねるうちに、自分たちの言語を守るよりも、新しい統治者が決めた言語環境に同化するほうが便利で有益であると考えからです。

たとえば、長いあいだイギリスの植民地支配を受けていたアイルランドでは、アイルランド語よりも英語が主流になりました(アイルランドは後に、オスカー・ワイルド、ジョージ・バーナード・ショー、ジェイムズ・ジョイス、サミュエル・ベケットなどの偉大な詩人や作家を輩出し、十分に英語に「仕返し」をしましたか)。

「ノルマン-フランス語」と「古英語」は、
便利だが複雑な「中英語」を生み出した

ところが、イギリスでは不思議なことが起こりました。

ノルマン-フランス語は古英語に取って代わることはありませんでした。この二つは共存し、混じり合って、複雑ではあるけれど、とても便利な一つの言語を生み出したのです。

古英語は、ラテン語から派生したノルマン-フランス語に追い払われることも、逆に相手を追い払うこともなく、自分自身のなかに取り込んだのです。つまり、古英語はノルマン-フランス語を受け入れ、「中英語」、または「中期英語」(Middle English)と呼ばれるまったく新しい形の言語を作ることと同化したのです。

古英語は具体的、 ノルマン-フランス語は抽象的な意味を表す

なぜこのようなことが起こったのでしょうか。

それにはさまざまな理由があるのですが、この二つの言語が、共に必要な、異なる目的をそれぞれ果たしていたというのが最大の理由です。

古英語の言葉のほとんどは、短く、簡潔で、具体的な意味を持っていました。一方、

ノルマン-フランス語の言葉は、たいてい長く、
流れるような音調や軽やかさ

を持っていました。また、「ノルマン-フランス語は、田舎に住む素朴な人々(アングロ-サクソン人)の言葉であった古英語にはない、抽象的・概念的な意味を表現することができた」のです。

古英語はすでに500年ものあいだイングランドの主要言語としてこの地に深く根づいていました。しかし、ノルマン-フランス語は、征服者により持ち込まれた言語にもかかわらず、イングランド南東部に比べると北部ではそれほど強い影響力を持ちませんでした。

このような歴史を経て、

もともと異なる二つの言語を土台にして、
膨大な語彙量を誇る今日の英語という言語が生まれた

のです。

古ノルド語が語源の「hard(ハード：Ⓢ)」という語と、ラテン語が語源の「difficult(ディフィカルト：Ⓢ)」という語はたがいに置き換えが可能な単語です。この二つは「難しい」というまったく同じ意味の形容詞です。

つまり、「English is hard.」と「English is difficult.」という文章はまったく同じ意味になります。

まったく同じ意味の単語ならば、時を経て、どちらか一つは消えていくのではないかと思いますよね？ しかし、そうはならなかったのです。

だから英語はhardなのです。だから英語はdifficultなのです。
似たような例を8つほどリストアップしましょう。

古ノルド語語源	ラテン語語源	意味
house(ハウス)	=residence(レジデンス)	家、住居
answer(アンサー)	=reply(リプライ)	答え、答える
ask(アスク)	=enquire(エンクワイア)	聞く、尋ねる
smell(スメル)	=odor(オウダー)	匂い、臭い
sweat(スウェット)	=perspiration(パースピレーション)	汗
freedom(フリーダム)	=liberty(リバティ)	自由
forgive(フォーギヴ)	=pardon(パードン)	許す
lawyer(ロイヤー)	=attorney(アトニー)	弁護士

語彙の半分はラテン語だが、 使われるのはアングロ-サクソン語

しかし、この英語の特徴に関する不可解なパラドックスがあります。

英語の語彙の半分以上はラテン語(あるいはギリシャ語経由でラテン語に入った言葉)が語源です。一部の学者によるとその割合は60%にもなると言われています。しかし、現代英語では数的には少ないアングロ-サクソン語が語源の単語のほうが、ラテン語が語源の単語よりもはるかに頻繁に使われているのです。

私は、このパラドックスを学生たちに説明する際に、よく、「英語の最頻出単語^{ひんしゅつ}100個のうち、何割がラテン語が語源で、何割が(古ノルド語を含む)アングロ-サクソン語が語源か？」と聞きます。

繰り返しになりますが、「単語の数でいうと、アングロ-サクソン語が語源の単語よりも、ラテン語が語源の単語のほうが多い」ということを頭に入れてください。

答えは、「100%、アングロ-サクソン語が語源」です(一部の調査では99%、つまり100語中99語がアングロ-サクソン語由来という結果もありますが、ほぼ100%がアングロ-サクソン語由来というのがほとんどの研究者の見解です)。

つまり、英語のボキャブラリー全体の60%をラテン語が語源の単語が占めているにもかかわらず、英語のネイティブスピーカーが最もよく使う100の単語はすべてアングロ-サクソン語が語源で、ラテン語が語源の単語は一つも入っていないのです。

これが英語の重大なパラドックスです。

アングロ-サクソン語が 語源の語はシンプルだが日本人には難しい

では、アングロ-サクソン語が語源の英単語の例をいくつか挙げてみます。

おわかりでしょうか、アングロ-サクソン語が語源の単語のほとんどは一音節の短い言葉です。次のリストの単語は、すべてそうです。

a(一つの)、all(すべて)、are(～である)、ask(聞く)、back(後ろ)、bad(悪い)、bird(鳥)、bite(噛^かむ)、cat(猫)、child(子供)、come(来る)、dark(暗い)、deep(深い)、drink(飲む)、eat(食べる)、earth(地球)、end(終わり)、foot(足)、fly(飛ぶ)、fun(楽しい)、grave(墓)、green(緑)、hand(手)、health(健康)、heart(心臓)、house(家)、I(私)、if(もし)、in(中に)、job(仕事)、keep(保持する、続ける…)、king(王)、know(知る)、land(土地)、late(遅い)、leg(脚)、life(人生、命)、light(火をつける、明るくする、軽い)、make(作る)、meat(肉)、milk(牛乳)、moon(月)、name(名前)、own(自分の)、path(道、経路)、quick(早い)、read(読む)、sky(空)、stone(石)、take(取る、連れて行く…)、tree(木)、up(上へ)、what(何)、where(どこ)、who(だれ)、wood(木、森)、you(あなた)、young(若い)....

あとからやって来た新しい言語であるラテン語が、ネイティブスピーカーの「マインドセット」にすでに定着していたこれらのアングロ-サクソン語単語に取って代わるなどということは、なかなか想像できません。なぜなら、見てもわかるとおり、これらの単語は「短くて、言いやすい」からです。

しかし、実は、ネイティブスピーカーにとっては便利なはずのこれらの「アングロ-サクソン語が語源の英単語」こそが、日本語の

ネイティブスピーカーにとっては非常に厄介なのです。

理由は、「それぞれの母音の発音に微妙な違いがある」からです。

つまり、発音が少しでも違ってしまうと、相手に理解してもらえないかもしれないのです(この点については、STEP 5 でまたお話しします)。

ラテン語が語源の単語は 長くて複雑だが日本人にはわかりやすい

では、今度はラテン語が語源の英単語を見てみましょう。

agriculture(農業)、desire(欲望)、feminine(女性的)、fiction(フィクション、創作)、figure(形、図、数字…)、grateful(感謝する)、liberal(自由主義の、寛大な)、miracle(奇跡)、patriotic(愛国的な)、popular(人気の)、problem(問題)、scholar(学者)、satisfy(満足する)、transportation(運送、乗物)、urban(都会の)....

もう違いがおわかりでしょう。

ラテン語が語源の単語は、長くて母音の数が多いものが主流です。これらの単語のスペルと意味などは、ロマンス諸語に属するイタリア語やフランス語の単語によく似ています。そしてラテン語が語源の単語は、アングロ-サクソン語が語源の単語よりも、概念的な言葉が多いのです。

ラテン語が語源の単語は、長くて概念的なことが多く、英語を学んでいる途中の日本人には難しい単語だと思われがちですが、実際は、STEP 3 で説明しますが、よりやさしい単語だということができるのです。

西暦1100年～1500年頃に使われた「中英語」は、さらに多くの宗教や学問に関する言葉をラテン語から取り入れました。しかし、

14世紀半ばまでには、中英語がイングランドに定着することが確実になります。そして、権力や影響力を失ったノルマン-フランス語は過去のものとなっていきました。

1350年までには、学校教育は中英語で行われるようになり、その後まもなく、イングランドの最も偉大な作家のひとりであるジェフリー・チョーサーが、代表作『カンタベリー物語(The Canterbury Tales)』を中英語で書くことになるのです(この作品は、1476年にイングランドで初めて印刷機を使って印刷された本です。当時の活版屋のほとんどがロンドンにあったために、イングランド南東部の方言がイギリス英語の「文学標準」となったのです)。

英語を料理にたとえると 「ラザニア」のようなもの

ではここで、アングロ-サクソン語と、語源的にはラテン語の要素からなる「英語団地」の比喩はちょっと横において、今度は英語をととても美味しいイタリア料理の「ラザニア」にたとえてみましょう。

「アングロ-サクソン語」の肉、オイル、小麦でできた板状のパスタに、「もともとラテン語が語源の言葉」のチーズ、トマトを加えて、何世紀もの間に英語に影響を及ぼした「他の多くの言語」というハーブやスパイスをふりかけます。

オーブンに入れる前の様子を見ると、それぞれの食材はまだばらばらで、とても一つのものにはなりそうにありません。でも、時が流れ、人々がこの言語を使い、同化していく過程は、高温のオーブンのようなものです。このオーブンのなかで、この不思議な食材の組み合わせが、一つの美味しい料理になるのです。

しかし、この「英語ラザニア」を美味しく食べるには、どんな食材が使われているのかを知っていなくてはなりません。みなさんは、食べる側のお客さんであると同時に、作る側のシェフでもあってほ

しいと思います。

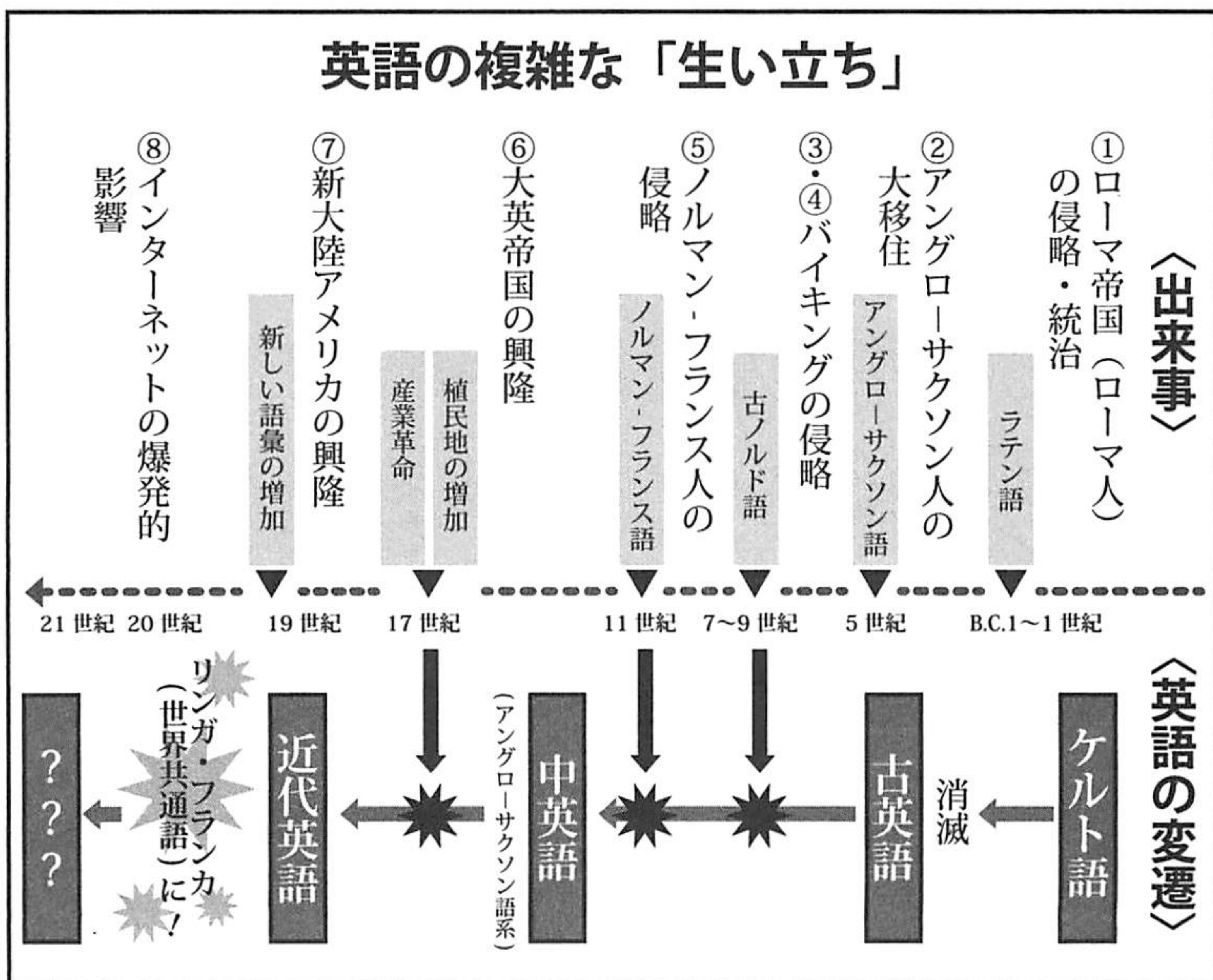
ということで、次にこの「英語ラザニア」の材料の見つけかたと、その材料をどのように調理すればいいのかを詳しく見ていきましょう。

その前にもう一度繰り返します！　まずは、

英語は、世界の主要な言語のうち、最も難しい言語の一つである

という客観的な事実を認め、しっかり覚悟を決めてから取りかかる必要があります。

でも、この「英語」をどのように料理してやればいいのかを知れば、五つ星レストランのシェフのように、みなさんが美味しい「英語ラザニア」を作るのも夢ではありません！



10 年間勉強しても英語が上達しない
日本人のための新英語学習法
ロジャー・パルバース・著
小川綾・訳

発 行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定 価：1,500 円（本体）＋税
発売日：2015 年 3 月 26 日
ISBN：978-4-7976-7292-3 C0082

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)